

2025 年度相模原キャンパス特別公開を振り返って

宇宙科学研究所長 藤 本 正 樹

相模原キャンパス特別公開 2025 が 10 月 11 日、12 日に開催された。土曜日にリアル、日曜日にオンラインという開催様式は確立されつつあり、出展者も慣れてきたように思われる。11 月初旬の天気のよい頃に開催することになっていたのだが、今年は他案件に譲る形で時期を早めたところ、暑さに困ることはなかったが台風の余波で雨とってしまった。それでも 11 日には多くの方に来場いただいた（約 7,000 名）。

研究所キャンパスの公開と同時に、相模原市が主催するイベント・宇宙交差点が研究所の斜め前にある市立博物館で開催された。その中でも、クリエイターズ・マーケットは踏み込んだ企画だと思えたが、出店者とお客さんが和気あいあいに会話する様子が見られた。なお、博物館の地下では宇宙研のイベントも開催させていただ



いた。また、ご近所の国民生活センターの中庭をお借りし、久しぶりに復活した水rocket企画が、雨にも関わらず多くのキッズを集めて、開催された。

研究所の建物に入るとロビーに MMX 探査機の 1/2 模型が鎮座しており、その周りで多くのひとが写真を撮っていた（ギガスターさん、ありがとう）。1/2 サイズであり良

い感じではあるのだが、これが実寸大となると、ロビーの天井に届くぐらいの高さ、着陸脚がド迫力のサイズ感を持つようになり、「さすが世界が注目する旗艦ミッション、MMX ってデカイ」という印象を強烈に持つことになる。

いくつかの場所に分かれて天文・宇宙物理関連の展示があった。JASMINE の望遠鏡実

寸大模型（これは MMX とは真逆に「この規模で世界最先端の成果を狙うのか」という嬉しい驚きを与えるもの）があったり、中身はめっさ難しい宇宙論関連のデータ図を使って神経衰弱ゲームが



できるコーナーがあったり、いろいろと工夫が見られた。難しいことを言っていれば「すごいね」と言われて尊重される時代ではないことをわかってきたみたいだ。

試験棟などでの装置類の展示には、ホンモノの迫力で勝負するという心意気を感じた。ややもすると不愛想とも取られかねない印象を与えるリスクがあるのだが、多くのひとが集まっていたし、出展者はちゃんと説明していた。

新しいファン層をつかむという意味では、キッズ向け企画が大事だ。その意味で、水ロケットの復活や研究所中庭でのサンプルリターンゲームはよかったし、ちゃんと見守りがついた形でキッズ遊び場が用意されていたことも大事だと思う。

新しいファン層は事前予約などしない。14 時から予約なしでも入場 OK としたこと

は、実際に（雨にも関わらず）多くに来てもらえたというナイスなアイデアだったのだが、混雑してしまったという結果もあり来年は工夫をする必要がある。

今回は「研究者カード」（なぜか、多くのひとにトレカと呼ばれていたが）を配布することをやった。宇宙研メンバーとの交流が、その場だけで終わることなく、カードにある QR コードから継続的な研究活動への興味に繋がるとよいと思う。最初に興味が惹かれるのは、目の前の模型だったりひとだったりするのだろうが、その始点から、できるだけホンモノへの興味を誘導したい。講演会や公開対談では現場エピソードを入れて工夫していることを、展示物にもカードを作ってそこから QR コードで情報を引き出すことが可能にすれば、特別公開の場合全体でホンモノへの誘導ができることになる。

来場者に女性、また、高校・大学生が増えているように思えた。X 線天文衛星に関する対談会で壇上に上がったのだが、その聴衆に、従来と比べればかなり多くの若い女性が見られたことは嬉しい驚きだった。高校大学生は、こういう「説教くさい」イベントに参加しない傾向があったのだが、それも変わってきているのか。それは宇宙研が工夫しているからなのか、全体的なトレンドなのか。

特別公開以外でのオンライン番組も含めて、若手に自由に企画を立ててもらうことをやってきている。当初の狙いは、ホンモノを出すことの一環として、実際に研究現場

に立つ若手に発信する機会を与えよう、というものであった。イベントを盛り上げるスキルという意味では進化をしてきているようだし、この活動を通じて研究室や専門領域の壁を越えるつながりもできているようである。一方で、当初の目的は上に書いた通りであり、それは妥当だと思っており、決して「お祭り」が目的ではないことを、敢えて、記しておきたい。

所長賞というものがあり、2025 年は MMX に出すことにした。あの場所に 1/2 機体模型を据えての受賞は「ズルい」と言われてしまうかもしれないが、来年の打ち上げに向けての応援をよろしくお願いします。また、特別賞は、復活してくれたことへの感謝として「水ロケット」、ナイスな企画を若手が出してくれたことをリマークすべく「研究者カード」とした。他にも多くの前向きな努力が見られたのだが、ポケットマネーでの表彰なので、このあたりで勘弁してください。